

(^\_^)v 趣味に生きる (第2回) ~☀~☂~☁~☪~☀~☂~☁

## 下手でも、バイオリンに感謝

池田 音

(埼玉医科大学総合医療センター中央検査部 教授)

趣味がないと退職したあと困るらしい。その事をすでに予想していたのだろう。母は、小学校五年生の私を無理やり近所のバイオリンの先生の所へ連れて行った。好きなテレビ番組が見られなくなって不満だったが、我慢して五年ぐらいレッスンを受けた。お陰で、下手ではあるが、バイオリンは趣味のようにになっている。練習しても一定のレベル以上に上達しないのは悔しいが、田舎の先生に教わったためだろう。自分の才能のせいとは思いたくない。それでも、大学のオーケストラに入ったり、結婚式では、スピーチが苦手なので、バイオリンをひいてお祝いのかわりにしたこともある。

ところが、数年前のこと、親戚の結婚式でバイオリンをひいた時、あがって、途中で指が完全にとまってしまった。初めての経験だった。宴席の終わりのほうで、アルコールを飲みすぎたせいもある。幸い、ピアノの伴奏の人はそのまま終わりまでひいてくれた。曲を知っている人は私がトチった事にすぐ気づいたろうが、知らない人は、異常に休みの多い曲だと思ったことだろう。この失態は趣味だから許されたことだった。もし、仕事がバイオリンで、医者が趣味だったら、大変だろうと思った。しかし、どちらも趣味だったら、もっと楽しいだろうとも思った。

名誉挽回のチャンスは、一昨年11月に訪れた。臨床検査大学院主催の「緒方富雄賞」授賞式の懇親会でバイオリンをひくことになったの



だ。ピアニスト(自称)のI先生との本邦初の競演である。5年ぐらい前、H市であった別の学会のパーティで、二人は、モーツアルトのソナタを演奏する予定だった。しかし、その時は、I先生が、当日重要な予定が入っていることを、急に思い出したため、キャンセルされて、5年ぶりに実現した。曲目はモーツアルトの「ピアノとバイオリンのためのソナタ」。二人は、互いに相手の演奏を聴いたことはなかったが、自分よりは上手いだろうと思っていた。

一度は音合わせしておいたほうが安全だろう、と思った私は、開会の1時間前に会場に着いていた。ヤマハの古いアップライトピアノが会場の隅にあった。頼んでおいた譜面台も用意されていた。私が練習を始めて30分ぐらいたったころ、I先生が到着した。大学で講義があったらしく、汗を拭きふき駆け込んできた。さっそく合わせてみたが、先生はなかなか調子がでないようだった。二度やってみたが、どうもうまくかみ合わない。聞くと、「風邪ひいちゃって

ネ」ということだった。モーツアルトは諦めて、急遽、曲目を変更することにした。これなら絶対弾けるという曲に変えた。ベートーベンの「メヌエット・ト長調」だ。「キラキラ星」や「ちょうちょ」でもよかったのだが、譜面がなかったし、二人とも年齢的に無理があるのでやめた。

懇親会が始まり、数人のあいさつのと宴席も進んで、二人の登場となった。I先生も私もかなり飲んでいたので、あまり緊張しなかった。「メヌエット」は、リズムに乗れて、上々の出来だった。耳に慣れた曲のためか、皆の評判はよかった。「お陰さまで癒されました」とお世辞を言ってくれる人もいた。たぶん、お酒で癒されたのだろう。気をよくした二人は、さっそく、来年はどの曲をやろうかと相談した。

一年がたって、昨年もまた「緒方富雄賞」の授賞式があった。11月7日。所も同じ神田の学士会館である。今回は「金婚式」という曲をやることに決めていた。当日早めに来て練習しようと思ったが、I先生は、今日も大学の用事があって来られず、ブツケ本番になってしまった。授賞式が終わって、立食パーティが始まった。宴もたけなわとなり、そろそろ出番も近づく。司会者は、私たちの演奏をアナウンスした。ところが、I先生の姿が見当たらない。どうしたのだろうか？ トイレだろうか？ それともビールをついでまわっているのだろうか？ I先生はサービス精神の旺盛な人だ。いつも、自分より人の幸せを考える人だ。しばらくして、司会者が私に「先生がいました」と報告に来た。よかった。私は見捨てられたわけではなかった。I先生は「ちょっと待って。今、譜面を探すから」と言って、カバンの中から「金婚式」の楽譜のコピーを取り出した。

「じゃ、ゆっくりネ」と合図して演奏を始めた。ところが、ピアノの楽譜をめくる人がいなかったため、途中で一度中断した。やり直してしばらく進んだが、I先生の譜面には最後のページがなかった。再び中断して、相談した結果、も

う一度最初に戻って繰り返して終わった。聴衆はアルコールの酔いのため、ほとんど反応がなかったが、途中で騒いだりブーイングする人もいなかった。全員が紳士淑女である。「金婚式」という曲は、とても美しい曲である。選曲には問題なかったと思う。晴れの授賞式に相応しいおめでたい曲だったからだ。演奏した二人は、もっとおめでたかったかもしれない。しかし、この曲が、皆が知っている曲だったのが救いだった。私たちの拙い演奏を通して、元の美しい旋律をイメージしてくれたのだろう。演奏が終わった時、大阪からいらしたT先生が「こういうのがあると、場が和みますよネ」と言ってくれた。それが、とても嬉しかった。その言葉を鵜呑みにした私たちは、また元気を取りもどした。

「そうなのだ。リサイタルは演奏者の自己満足に終わってはいけない。聴衆が満足してこそ成功と言えるのだ。」

二人は、「バイオリン名曲集」の中から、来年の曲を探した。「名曲集」には、全部で30曲ぐらい載っている。そのうち私がひける曲は20曲ぐ



2008年「緒方富雄賞」の授賞式にて

らいある。この会は年に1回だから、もしI先生も私も死ななければ、あと20回はだいじょうぶだ。

来年も、聴衆には今年以上に十分アルコールを飲んでいただいて、意識を失う前に、耳障りでない音楽を提供しようということになった。何事も継続する事が大切である。継続は力だ。しかし、継続は疲れるものでもある。

私は、下手なバイオリンでも続けてきてよかったと思った。これが縁でI先生とも音楽友達になれた。同学院の皆様とも心を通わせることが出来た。「芸は身を助ける」とまではいかないが、バイオリンは、私の欠点をカバーしてくれる。

下手でも、バイオリンに感謝！

読者の方にはさまざまな趣味をお持ちの方がおいでかと思えます。  
編集室では本コラムへのご投稿を心よりお待ちしております。